

ようこそ そして おかえりなさい 57名が登録・更新されました

年度別新規登録者・在籍者数

在籍者数(人) 新規登録者数(人)	2019年度	2020年度～ 2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
2期生 2019年度	39 女18 男21	受講・ 新規募集 中止期間	25 女10 男15	19 女7 男12	12 女7 男5	4 女2 男2
3期生 2022年度	—		8 女1 男7	7 女1 男6	6 女1 男5	5 女1 男4
4期生 2023年度	—		—	12 女4 男8	10 女4 男6	7 女2 男5
5期生 2024年度	—		—	—	31 女13 男18	20 女6 男14
6期生 2025年度	—		—	—	—	21 女10 男11
合 計	90 女34 男56		68 女23 男45	65 女21 男44	66 女29 男37	57 女21 男36

AI時代に学ぶことの意味

コーディネーター 廣瀬 隆人



1980年代以降、SF映画の中で「発達しすぎた人工知能(AI)が人間の脅威になる」という物語が描かれてきた。私たちの世代(60歳代)には便利なものには必ず陥落があるという教訓が埋め込まれている。

代表作がアーノルド・シュワルツェネッガー主演の『ターミネーター』である。それ以降、AIはモニターの中ではなく概ね人間の形をしていて、しかも無表情であることが多い。そこには、思いやり、優しさ、まごころ、愛情といった数値化も見える化もできない、感情面は排除されている。

しかし、私たちの使用するAIであるパソコンやスマホの中に存在するチャットGPT、Geminiなどは無表情でもなく、完璧でもなく、間違えたりしてお茶目なところを見せてはいる。若い人たちと仕事をすると、躊躇いなくAIの助けを借りている。高度に利便性を追及することができそうである。単純作業を省くことができるのはうれしいが、その替わりに失うものに気が付かなくなる危険性があるのではないか。副作用として自分の頭で考えなくなるのではと不安になる。それは磯遊びに夢中になっていて、潮が満ち始めていることに気が付かなくなり、陸に戻れなくなるかのようである。私たちが学び続けるのは、次にどうなるのかを予想することである。AIに考えてもらう、誰かに考えてもらうことは多くのストレスを低減し、楽に生きることができる。なりゆきまかせに生きる方がはるかに楽なのだ。私たちは新しい動き、特にカタカナには必死に対応しようとしてしまうことがある。AIを自分のパソコンやスマホにダウンロードし、使いこなそうとし、過剰に適応してしまうのだ。それはそれで「学び」ではあるが、私たちは経験と知識・論理という濾過装置を持っているはずだ。教育の目的の一つに主体の形成があるが、それは自分の頭で考え、自分の心で感じ、自分の言葉で納得し、自主的に判断し、行動できることである。そしてそれはけっこうやっかいなことでもある。誰一人取り残さないらしいSDGsもあと数年で期限が終了するようだ。全てのことには理由があり、全てのことは疑い得ることからスタートし、学び、自己の思考や判断を問い合わせ、鍛え直していくことによって、誰かに容易に誘導されない自分になることなのだ。「考えることを止めたら人間ではなくなる」とハンナ・アーレントは言ったが、考える楽しみをAIに奪われることなく、自分のものにする、そんな確信が持つために、UUカレッジはある。

UUCollege • Newsletter マツリカ特集

No.8

第75回峰ヶ丘祭に参加しました**UUカレッジ・マツリカ代表 青木 薫（4期生）**

今年の峰ヶ丘祭は75回目を迎えました。私たち「UUカレッジ・マツリカ」が大学祭に初めて参加したのは、新型コロナウイルスによる制約から解放され、4年ぶりに制限のない開催となった2023年でした。パンデミックは、学生だけでなくUUカレッジの1期生、2期生の学びにも大きな変化をもたらしました。その中で「久しぶりの大学祭を学生と一緒に**心からEnjoy（楽しむ）**したい」という思いから、UUカレッジ・マツリカの企画はスタートしたのです。

さて、2025年度は1期生から卒業生も出たこともあり、「Enjoy」の意味をあらためて問い合わせ直す必要がありました。社会人の学びの目的や背景は多種多様ですが、メンバー間で議論を重ねた結果、「掘り下げる」とこそが共通項ではないかという結論に至りました。「知れば知るほど、知らないことが増える」という学びの矛盾をはらみながらも、「掘り下げる」という行為には、まるで宝探しのような楽しさがあります。

そして、峰ヶ丘祭全体のテーマが「Re:Mine (Re:再び + Mine: 峰、自分のもの)」、すなわち「熱気溢れる峰ヶ丘祭をもう一度」となったことに呼応し、私たちのテーマも「Mine（採掘する）」を取り入れ、「Enjoy + Mine」としました。これは、単に「私の」という意味だけでなく、データマイニング（data mining）という言葉が示すように、宇都宮大学やUUカレッジという「知識の宝庫（a mine of information）」を深く掘り下げるという思いが込められています。このテーマに基づき、サブテーマとして「地産を食す」「使い続ける」「学び続ける」の3つを設定し、企画を実施しました。

**模擬店「地産を食す」**

- ・宇都宮で生まれ育った1年熟成したサツマイモ（熟成の背景）
- ・壬生の就労継続支援B型事業所で作られるパン（福祉と連携）
- ・鬼怒川の畔の100年続くお饅頭（地域に根ざした歴史）

食の安心・安全を届けるためには、それぞれの背景や、地域の歴史を調べる事で楽しみを増やすことへの挑戦。

教室イベント「使い続ける」

- ・使い古した布を裂いて糸を作り、一段一段織り込んで新たな布に再生する裂織（さきおり）ワークショップを実施。高織（たかはた）を趣味で行っている方と、段ボール機で織る経験のある方に、先生になって頂き、「ものを使い続ける」ことの価値を知る楽しみを増やすことへの挑戦。

教室イベント「学び続ける」

- ・UUカレッジ生が受講できる科目一覧を壁一面に掲示し、在校生との語らいの場を設けました。「学び続けたい」と願う来場者の楽しみを増やすことへの挑戦。

また「タイパ（タイムパフォーマンス）」が重視される時代において、いかに情報を届けるかには苦慮しました。協働板への掲載に加え、新たにInstagramでの発信にも挑戦しましたが、フォロワーは9名と、まだまだ改善の余地があることを痛感しています。

最後に、まだまだUUカレッジ、宇都宮大学という金鉱は掘る場所がいっぱいあると思います。是非皆さんで掘ってみましょう。